

竹苞書樓の板木

— 狂詩集・狂文集を中心に —

はじめに

現在も京都寺町姉小路上ルに店を構える竹苞樓（現、竹苞書樓）は、代々佐々木惣四郎（佐々貴・鶴鶴・娑々岐とも、また錢屋とも）を名乗る寛延四年の創業になる古書肆である。同店に保存されていた板木約二千五百枚を、奈良大学へ搬入し整理・調査を開始したのは、平成十六年四月のこと。七代目御当主佐々木英雄氏との最初の約束では、数年かけて整理をし、目録を作成して板木のデータを採ったあと御返しする予定であったのだが、同年十二月に氏から一括譲渡の御相談があり、膨大な量の板木は、十七年六月、奈良大学の蔵に帰することになった。その板木、大略分類したところによれば、漢詩文集・伝記・隨筆・和歌集・雜俳書・狂詩狂文集・有職故実書・辞典・茶道書・紀行文・歌集注釈書・四書五経・画集・史書・狂歌集・滑稽本・書道手本・本草・仏書・印譜・篆刻書・硯譜等々、ジャンルは多岐に亘る。このうち、比較的著名なものを列記してみると、「謝茂秦詩集」

永* 井 一 彰

（龍草廬選、宝暦十二年刊）、この稿で取り上げる「太平楽府」（畠中観斎著、明和六年刊）以下の狂詩集・狂文集、「茶経詳説」（大典顯常著、安永三年刊）、「毛詩品物図攷」（岡元鳳著、天明五年刊）、「清風瑣言」（上田秋成著、寛政六年刊）、「山家集抄」（釈固浄著、寛政七年刊）、「好古小録」（藤貞幹著、寛政七年刊）、「好古日録」（藤貞幹著、寛政九年刊）、「春葉集」（上田秋成版下、荷田信郷編、寛政十年刊）、「閑田文章」（伴高蹊著、享和三年刊）、「花競二卷断」（浪花一九著、文化十一年刊）、「百首異見」（香川景樹著、文政六年刊）、「古今和歌集正義」（香川景樹著、天保六年刊）、「名家略伝」（山崎美成著、天保十二年刊）、「百家琦行伝」（八島五岳著、弘化三年刊）などがあり、それ以外にも、竹苞樓創業以前に彫られたことが明白な「公事言葉考」（延宝九年刊）、「懐風藻」（天和四年刊）、「東見記」（貞享三年刊）、「十八羅漢図譜」（貞享四年刊）、「菅家文集」（元禄十三年刊）に混じって、年代は今のところ確定できないものの

『倭名類聚抄』（二種類あり）、『続日本後紀』など元禄以前と目される古い板木も、かなりの枚数が残っている。これら創業以前の古い板木は、京都の本屋としては後発に属する竹苞書楼が、生き残りのために売れ筋の古い板木を他の店から積極的に買い入れて営業活動を行っていたことを示す史料と言える。また、そういった「まともな」板木他に、未刻の板木や彫りさしの板木、再利用するために刻面を削ってそのままになっている板木、新規商品売り出しの際に店頭にはめす「摺看板」印刷用の板木、それに板木反り止めのために両端にはめ込む梓（所謂「食み」）など、近世出版工房の実態を如実に伝える史料も少なからずあり、さながら近世の本屋が一軒丸ごとタイムスリップして来たかの如き観がある。近世の出版研究は、これまでの出版物をベースにしたそれから、板木をも視野に入れた研究へと動いて行くべきと筆者は思量するが、その意味で竹苞楼旧蔵の板木の調査・研究が今後の近世出版研究に資するところは少なくないと思われる。これらの板木は全揃いのもの・不揃いのもの様々で、今後版本と照合し、近世出版現場の多様な情報を収集して行く必要があるのだが、何分にも膨大な量で、ことは容易ではない。そこでこの稿では、後発書肆竹苞楼が商売の一つの柱とした狂詩集・狂文集のそれについて、取り敢えず調査の結果を報告しておくことにしよう。

竹苞楼が出版・再版に関わった狂詩集・狂文集は次の十五点である。ゴチックで示した三点は狂文集、他は狂詩集で、相合版の場合

*に相版元を記した。なお、『精物業府』『狂詩馬鹿集』は所謂「求板」で、これについては後に詳述する。

太平楽府	島中観齋著	明和六年八月序・跋
前戯録	河村先生著	明和七年三月刊
茄子腐菓	可々子著	明和七年八月刊
勢多唐巴詩	島中観齋著	明和八年八月刊
毛護夢先生紀行	海道雲飛助著	明和八年八月刊
諷題三詠	鏡間私章著	明和八年八月刊
吹寄叢求	島中観齋著	安永二年四月刊
銅脈先生太平遺響	島中観齋著	安永七年秋刊
忠臣蔵人物評論	島中観齋著	天明元年六月刊
銅脈先生狂詩画譜	島中観齋著	天明六年春刊
二大家風雅	観齋・南畝著	寛政二年七月刊
太平遺響二編	島中観齋著	寛政十一年序
精物業府【求板】	悟了軒泥坊著	寛政十三年序
統太平楽府	愚仏著	文政三年序
狂詩馬鹿集【求板】	兆載坊著	*京都堺屋伊兵衛 文政十年夏刊

次頁の別表に示したものが右の狂詩集・狂文集の残存板木の一覧である。この狂詩集・狂文集の板木に限らないが、保存処理が施されな

狂詩集・狂文集 残存板木一覽

* 4桁の数字は板木の整理番号。その右に示したのが、その板に取められている丁で、右端が板木の寸法（丈×幅×厚み、単位耗）である。失われて残らない板木については、残存板木から取録の丁を推測して「欠」として示した。「茄子腐葉」「勢多唐巴詩」「二大家風雅」には、もともと板木に紐で結び付けられていた「木札（印刻、朱挿し）」が残っており、それぞれ表裏の内容を注記した。なお、「紐穴」としたのは、その板に木札を結びつけるための穴があけてあることを示す。

太平楽府 A（全7枚のうち、1枚欠）

欠	袋・題簽、序1・2	
1898	序1・4、2・3	527×140×20
1846	卷一1・4、2・3	531×138×18
1101	卷一5・卷二8、卷二6・7	530×146×18
1123	卷二9・卷三16、卷三10・15	532×143×16
1156	卷三11・14、12・13	532×137×18
1063	卷三17・18、跋1・2（刊記）	530×140×20

太平楽府 B（7枚全揃い）

1058	袋・題簽（2枚）、序1・2	454×150×18
1046	序1・2、3・4	456×150×20
1055	卷一1・2、3・4	456×150×20
1057	卷一5・卷二6、卷二7・8	455×151×18
1050	卷二9・卷三10、卷三11・12	460×151×18
1916	卷三13・14、15・16	455×150×19
1056	卷三17・18、跋1・2（刊記）	460×149×19

前藏録（全7枚のうち、1枚欠）

欠	題簽・袋・刊記	
1078	跋1・序2、序3・跋3	550×154×20
1082	1・4、2・3	550×154×19
1079	5・6、7・8	548×156×19
1070	9・10、11・12	550×153×20
1064	13・14、15・16	552×155×20
1065	序乙・跋2、17・18	550×153×19

茄子腐葉（5枚全揃い）

* 木札表に「茄子腐葉」、裏に「五牧袋外」。

1083	袋・題簽・跋3（刊記）、跋1・2	532×153×19
1051	序1・2、序3・13	532×154×19
1084	1・2、3・4	534×154×18
1080	5・6、7・8	528×154×17
1052	9・12、10・11 *紐穴	535×155×18

勢多唐巴詩（6枚全揃い）

* 木札表に「勢多唐巴詩」、裏に「六牧扉袋外」。

1500	口絵・袋・刊記、題簽（2枚）・序5	548×144×17
1060	序1・序2、序3・序4	550×148×19
1075	序首・序尾、跋（2丁） *紐穴	547×144×18
1097	卷一1・卷一3、卷二7・卷三12	548×144×19
1059	卷一2・4、卷一5・卷二6	546×147×18
1045	卷二8・卷三9、卷三10・11	548×147×19

毛願夢先生紀行（全5枚のうち、2.5枚欠）

* 元は4丁張りか。③④で1枚、⑤⑥で1枚、⑦⑧で1枚、⑨⑩で1枚、⑪⑫で1枚、合計5枚あったか。半分の2.5枚欠。

①	欠	題簽・袋	
②	欠	序首・序尾	
③	欠	1・2	
④	2197	3・4	204×153×18
⑤	2199	5・6	203×140×19
⑥	欠	7・8	
⑦	2207	9・10	206×148×17
⑧	2203	11・12	205×150×16
⑨	2204	13・14	206×140×19
⑩	欠	15	
⑪	欠	跋1・跋2	

興題三味（全5枚のうち、1枚欠）

* 元は4丁張りか。①②で1枚、③④で1枚、⑤⑥で1枚、⑦⑧で1枚、⑨は「広安禮節」と組み合わせて1枚。合計5枚あったか。うち、4枚残存。

①	2194	題簽・刊記、跋	206×149×15
②	2193	叙1、叙2	207×146×18
③	欠	（巻上1、2）	
④	2195	巻上3、4	207×146×17
⑤	2198	巻中5、6	205×147×17
⑥	2196	巻中7、8	207×144×15
⑦	2191	巻下9、10	204×152×18
⑧	欠	（巻下11、12）	
⑨	2317	袋・「広安禮節」題簽、罫紙	200×144×18

吹寄職求（6枚全揃い）

1845	袋・題簽（2枚）・序3、序1・序2	545×150×20
1850	序1・2、序3・標題上	545×142×20
1175	巻上1・2、3・4	549×138×20
1849	巻上5・7、6・8	550×144×21
1843	巻上9・11、12・15	550×142×21
1848	巻上13・14、10・16（刊記）	548×139×19

銅版先生太平遺響（全7枚のうち、4枚欠か）

1180	序1・2、3・4 *紐穴	550×146×19
1902	卷一乙・2、3・4	547×148×19
欠	卷一5・6・7・8	←推測
欠	卷二1・2・3・5	←推測
1119	卷三1・2、3・巻二4	550×148×20
欠	卷三4・5・序1・2	←推測
欠	跋1・2・3・題簽・袋	←推測

忠臣蔵人物評論 (全6枚のうち、2枚欠)				527×142×20
欠	題簽・袋		1162 卷三3・4、2・5	532×143×18
1172	序1・序2、3・4	576×160×20	1897 卷三6・7、8・9	532×145×19
欠	5・6、7・8		1110 卷三11・12、10・13	533×145×19
1173	9・10、11・12	572×163×17		
1170	13・14、15・16	575×161×18		
1171	17・18、19・20終(刊記)	574×158×20		
銅版先生狂詩画譜 (6枚全揃い)				
*2318と1141の切り口、合致。もと6丁張り1枚。				
2318	題簽(2枚)・広告(刊記)、23	260×150×19	1091 序1・下13、序2・上3	643×165×17
1141	袋・見返し、24・18	471×149×19	1054 上15・5、4・6の10	638×161×20
1074	1・2・3(目録)、序1・序2・3	732×150×18	1092 上11・13、12・14	639×164×18
			1043 下1・4、2・3 *紐穴	630×162×18
1073	6・9・21、7・5・8	735×148×18	1093 下5・8、6・7	637×170×17
1072	10・11・12、13・14・15	730×150×19	1856 下9・10、11・12	636×164×19
1076	16・4・22、19・17・20	736×149×18		
二大家風雅 (全6枚のうち、1枚欠)				
*木札表に「二大風雅」、裏に「六枚袋外」。				
1124	序1・発端1、序2・発端2	515×142×20	1914 序1・序4、序2・序3	435×140×18
1847	1・2、3・4 *紐穴	520×144×20	欠	序5・1、2・3 ←推測
1896	5・6、7・8	520×142×20	欠	4・5、6・7 ←推測
1176	9・10、11・12	520×144×18	1927 8・11、9・10	429×140×18
1844	14・15、13・16	522×142×19	欠	12・13、14・15 ←推測
欠	17・18、題簽(2枚か)・袋		1903 16・19、17・18	429×140×20
			欠	20・21、22・袋・題簽 ←推測
			欠	序1・序2、跋1・跋2 ←推測
太平遺響二編 (全7枚のうち、1枚欠)				
欠	題簽・袋			
0000	序1・序2、卷三14・15	←この板、汚損 531×142×19	1163 題簽・刊記・跋、11・12	548×150×18
1049	卷一1・2、3・4	534×144×20	00A 序1・序2・1、2・3・4	656+α×145×17
1121	卷一5・卷二2、卷二1・卷三1	*紐穴	00B 5・6・7、8・9・10	652+α×147×20
精物楽府 (青物時選) (7枚全揃い)				
1855	14(跋1)・袋(栄耀寝言)・題簽削除痕、 15(跋2)・題簽(栄耀寝言上・下)・刊記			
続太平楽府 (全8枚のうち、5枚欠か)				
*板木の両端、裁断。				
狂詩馬鹿集 (3枚全揃い。但し、うち2枚虫損。)				
*袋板、もともと無し?				

いま百年以上の長期に亘って放置されていたため、汚損・虫損が目立つものが多く、板木の状態は全体的に芳しくない。極端な例を挙げてみると、『太平遺響二編』0000番などは触ると崩壊するようなありさまで、『毛護夢先生紀行』2199番収録の五丁の刻面は白蟻によって食み尽くされて、数文字しか残らない。が、中には『勢多唐巴詩』のように汚損・虫損も殆どなく、板木が揃って残った幸運な例もある。竹苞楼が出版・再版に関わった狂詩集・狂文集は、『太平楽府』Bも含めると、合計十六点。手許に収集した該書版本及び浅川征一郎氏著『狂詩書目』(平成十一年、青裳堂刊)の解題と照合してみると、うち、板木が全揃いで残っていると考えられるもの七点、一枚だけが失われたもの五点。全体で見ると、この十六点の狂詩集・狂文集の印刷に必要であった板木は合計98枚で、残存板木が79.5枚、残存率約81%ということになる。仮に痛みが激しくても、版本との照合により板木元姿の推察は可能で、これだけの板木を救えたことを、まずは慶びとしたい。

一 板木により判明する事実

ところで、狂詩集の書誌学的研究で遙かな高みを示しておられるのは前述の浅川氏著『狂詩書目』である。今回の

板木調査を機に、筆者も狂詩集・狂文集の版本を鋭意収集し、国文学研究資料館から複写等も取り寄せ、また平成十七年五月に奈良大学へ寄贈された故宮田正信博士旧蔵書の中に七十点近い狂詩集・狂文集が含まれていた（以下論中で宮田本と言う）こともあって、かなりの数に当たったつもりであるが、書誌的事項に関しては浅川氏の著書に付け加えるようなことは殆どない。が、板木が出て来たことにより、版本からは判らなかつたことも少し見えて来たので、先ずはその幾つかについて簡単に報告する。なお、図版は論文巻末に一括して掲載する。

1 題簽のこと

竹苞楼旧蔵の狂詩・狂文集の板木には、題簽が二枚並べて彫つてあるものが散見する。「太平楽府」B・「勢多唐巴詩」（図Ⅰ下段参照）・「吹寄蒙求」・「銅脈先生狂詩画譜」（図Ⅲ参照）がそれである。売れ行きが見込めると本屋が判断した書物の場合、摺り手間を少しでも省くために複数枚の題簽を並べて彫っておく例がけっこうあることは、かつて拙稿「『おくのほそ道』蛤本の謎」（奈良大学総合研究所所報9号）でも図版を添えて示したことがある。私を含め出版研究に携わる者は、版本の書誌調査を行う折に「題簽が少し違うから同じ時に摺られたのではない」と考えがちであるが、かような板木を見ていると、題簽に小異あるを以って別時印刷とする従来の書誌学的常識は通用しないということになる。因みに、「勢多唐巴詩」を例にとつて確認をしておけば、家蔵本①・②・浄照坊本・大喜多勸学本・「未翻刻狂詩十一

種」底本は図版の二枚並びの左の方で、抱谷文庫本・上田市立図書館花月文庫本（以下、花月本と略称）・宮田本①・②は右の方で摺られたものである。なお、題簽の板木は残念ながら失われているが、諸版本を調べてみると、小異の題簽が二種認められるものとして「二大家風雅」「銅脈先生太平遺響」「忠臣蔵人物評論」が上げられる。この三点も、板木には題簽が二枚用意されていたと考えて間違ひなからう。「茄子腐藁」（図Ⅳ参照）「諷題三咏」は題簽の板木が残り、題簽は一種一枚のみで、管見の版本は全てこれに一致している。「前戯録」「毛護夢先生紀行」「太平遺響二編」は題簽の板木は失われているが、管見の版本の題簽、全て一種同板である。

2 袋・見返し

近世の出版物は、袋入りで販売されることが少なからずある。その袋は当然のことながら板木にも用意されていて、近世の本屋は袋が彫り付けてある板のことを「袋板」と呼んでいるのであるが、袋が見返しとして転用されている場合もまま見受けられる。また、袋と見返しの両方を板木に彫るケースもある。この袋と見返しの問題は、従来の出版研究でもきちんと整理されているとは言い難い面もあるので、そのあたりの事情をこの一連の板木で見えておくことにしよう。

『茄子腐藁』の板木は五枚全揃いで、前掲一覧表の解説で触れたように、もともと板木に紐で結び付けられていた木札（陰刻、朱挿し）が残っており、札の表には書名が、裏には「五牧袋外」と入れてある。言うところは「袋板他も含めて板木は全部で五枚ある」の意味。

従って、図Ⅳに示した1083番の板木に題簽などと並べて彫つてあるのは、間違いなく袋なのである。版本を調べてみると、宮田本・抱谷文庫本には袋も見返ししの印刷も無いが、浅川氏編『未翻刻狂詩九種』の底本に、この板木で印刷した見返しがある。これは袋を見返しに転用したケースと見るべきである。なお、袋中央部の「茄子腐葉」の部分が入木であることも板木から判明する。

『調題三昧』は、元は四丁張の板木であつたものが二丁張に裁断されて残っている。元姿で言えば、四丁張五枚のうち四枚が残存し、そのうちに袋板(2317番)も含まれている。これは『狂詩書目』紹介本に袋があり、もともと袋のつもりで板木を仕立てたことは明白。なお、宮田本、袋・見返し無し。

『二大家風雅』にも木札が残っており、裏に「六枚袋外」とある。残存板木は五枚で、「17・18丁・題簽(2枚か)・袋」が収めてあつたと思われる袋板が失われている。版本を調べてみると、花月本に竹苞楼の朱印を捺した袋が残る。大喜多勘字本にも同板の見返しがあり、魁星印及び竹苞楼の朱印を捺す。『狂詩書目』口絵底本にも同板の見返しがある。家蔵本・宮田本・奈良大学蔵本には、袋・見返しとも無い。袋板が失われているので断定は憚られるものの、『茄子腐葉』の例に照らして、これもまた、元は袋として仕立てたものを見返しに転用した例と見てよい。

『吹寄蒙求』には木札が残らない。が、諸版本と対校するに、残存板木六枚で全部揃っていると断定して間違いない。1845番が袋

板。家蔵本・蓬左文庫本・大喜多勘字本・宮田本、いずれも袋・見返しとも無し。近世文学未刊本叢書『狂詩狂文集』収録底本に、この板木で摺った見返しがあるが、これも袋の転用。

袋板の残らないものについて触れておけば、『忠臣蔵人物評論』は花月本に、『太平遺響二編』は奈良大学蔵本にそれぞれ袋が残り、『前戯録』『毛護夢先生紀行』『銅脈先生太平遺響』『続太平楽府』については袋の存在は確認出来ないが、それぞれ見返しを持つ版本が確認できる。

次に、袋と見返ししの両方が用意されている例を見ておく。『勢多唐巴詩』は、板木六枚全揃い。木札も残り、裏に「六枚扉袋外」とある。袋と蕪村画の扉絵、それに刊記・題簽(2枚)・序五丁を収める該当の板木(1550番)が、図Ⅰに示したそれ。上段左が扉絵、中央が袋である。『狂詩書目』該書解説に魁星印絡みで袋のことに触れるが、未見とする。家蔵本①・②・浄照坊本・抱谷文庫本・花月本・大喜多勘字本・宮田本①・宮田本②・『未翻刻狂詩十一種』の底本、何れも袋無し。今回の板木出現で、袋の様子がはじめて明らかになった。蕪村の扉絵を添えるのは、浄照坊本・抱谷文庫本・花月本・大喜多勘字本・宮田本①・『未翻刻狂詩十一種』の底本。管見の範囲内では、袋を見返しに転用した本は見当たらない。狂詩集としては特殊な扉絵があつたため、袋が見返しに転用されることがなかったのだと思われる。

『銅脈先生狂詩画譜』も、板木六枚全揃い。図Ⅱの1141番の板

木に並べて彫ってある右側が袋、左が見返しと思われる。『狂詩書目』紹介本のうち、早印本には袋を見返しに、『未翻刻狂詩十一種』底本の後印本（序文末の印二種差し替え・本文ルビ十四余箇所補刻）には見返し用のそれを見返しに貼る。大喜多勤学本・花月本・宮田本には、袋・見返しとも無し。奈良大学蔵本は、袋は無く、見返し用の見返しあり。

以上二点、袋を添え見返しのある本は報告されていないが、板木により完備した姿を知ることが可能となった。

3 版元・元書名

板木が出て来たことにより、今まで不明であったもとの版元・もとの書名が判明する例が二つある。

『狂詩馬鹿集』は、四丁張一枚と六丁張一枚の板木計三枚が揃いで残存し、かなり虫損はあるものの、版本と照合することにより板木の元姿推察が可能である。奈良大学蔵本によつて、版本の書誌を記す。藍色表紙、中本一冊。左肩に双辺白地元題簽「狂／詩 馬鹿集 全」。全十五丁。序文二丁（丁付、版芯「序 一、序 二」・本文二十二丁（丁付、一／十二）・跋文一丁（丁付なし）。刊記なし。ただし、後表紙見返し隅に「竹苞樓／製本記」の朱印。『狂詩書目』紹介本も、右に同じ。該書につき『狂詩書目』解説では、版本に刊記がないため、「丁亥立春」の一詩あるを以つて文政十年刊とし、「京都板であろう。良本未見、初印は竹苞樓ではあるまい。」と推測しておられるが、その通りであった。図Vの板木1163番に、題簽と並んで「文政十年

亥初夏発兌／書肆 醒井五条下ル二丁目子屋庄兵衛」と刊記が彫られていて、もともと丁子屋で仕立てられた板木であったことが判明する。なお、板木の「文政十年」の「十」の部分、拓本の図版では分りにくい、入木である。板木のこの刊記部分に虫損が無かったのは、幸運の一語に尽きる。なお、該書、袋の有無不明。

『精物楽府』（『青物詩選』改題本）は板木七枚が残存する。『狂詩書目』紹介の『青物詩選』の書誌を記す。薄青表紙、中本、上下二巻一冊。序文二丁、丁付版芯「一」「二」。本文二十八丁、丁付版芯「寢言上 三／十五」「寢言下 一／十五丁」。刊記「享和三年歳在癸亥冬 書林 京都御幸町御池上菱屋孫兵衛／江戸通石町十軒店西村宗七／大坂心齋橋博（博） 旁町柏原屋庄兵衛／紀州若山新通三丁目総田屋平右衛門」。管見に拠れば、表紙の色は不明ながら、石川県立図書館李花亭文庫本（以下、李花亭本と略す）がこれと同じ体裁。ただし、元題簽・刊記欠。『狂詩書目』該書解説に次のようにある。「序・巻頭・跋の『青物詩選』という書名にはいずれも埋木による改刻の形跡があり、また柱記題は「寢言」とあるから、元は別の書名であったか」。これも、浅川氏の御指摘通りで、板木の序・巻頭・跋の「青物詩選」という書名部分は全て入木である。また、元の書名が板木により判明する。図VIの板木1855番の表面に、袋が「泥坊上人著／榮耀寢言／青藜堂」と、その裏面（図VII）には題簽が「榮耀寢言上（下）」と彫られていて、元書名が『榮耀寢言』であったことが判明する。なお、図VIIに題簽と並べて彫られている刊記は「狂詩書目」紹介本とは異なり、年記は入

れずに「書肆 京都御幸町御池上ル菱屋孫兵衛／大坂心齋橋書物町河内屋多助／紀州若山新通三丁目加勢田屋平右衛門」とある。板木に彫られてある袋の青藜堂とは「増補／近世書林版元総覧」によれば、総田屋平右衛門のこと。したがって、「青物詩選」は、もともと「栄耀寝言」という書名で、和歌山の総田屋平右衛門を主版元として京都の菱屋・大坂の河内屋相版で出版され、その後、同じ三軒から「青物詩選」と改題再販されたことが知られる。因みに「栄耀寝言」は、「国書総目録」等に未載。なお、「狂詩書目」解説ではこの板木と同じ刊記のある本を後印本とされるが、むしろ逆で、板木と同じ刊記を持つ三軒版が早印本で、前述の四軒版を後印本と考えるべきだと思う。四軒版の年記が享和三年冬であるから、早印本はそれよりも早く、序文の記された寛政十二年冬もしくは翌年春頃ではないだろうか。

この「青物詩選」の求板改題本が竹苞楼刊の「精物楽府」である。これについて、「狂詩書目」では次のように解説しておられる。

青表紙、題簽「精物楽府」（単梓）、見返し「膾脈先生著／青物楽府／書肆 長才房」（単梓有罫3行）。奥付なし。裏表紙に「勢多唐巴詩」他の蔵版書目半丁貼付。柱刻を削り丁付のみ残すが、上入れ替わった丁と四丁の飛び丁がある。即ち上巻四く十一丁は下巻のもの、下巻四く十一丁は上巻のもので、下巻の「六」を「六ノ十」と改刻、飛び丁とする。四丁分の版木が失われたため
の細工であらう。

管見によれば、竹苞楼求板以前に、右のように改刻した三軒版の

「青物詩選」がある。大阪女子大本がそれで、表紙の色は不明。左肩に双辺「青物詩選 全」の元題簽があるが、書体は狂詩書目紹介の四軒版とはかなり異なる。柱刻を削り丁付のみ残し、同様の乱丁（一部に小異）がある。裏表紙の蔵版書目は無い。浅川氏が言われる如く四丁張りの板木下巻七く十丁の欠を補い、かつは改題書名と柱刻との不整合を解消しようとした商業に出たものであろうが、結果、上・下巻の区別がつかなくなり、乱丁をも生んだのである。この大阪女子大本、刊記は板木のそれと同じであるから、これらの改刻処置は早印三軒版の手許で行なわれた筈である。竹苞楼はそれをそのまま求板し、「精物楽府」と改題したに過ぎなかつたのである。なお、「狂詩書目」紹介本と同じ題簽を持つものに宮田本がある。青表紙で、見返し・刊記・蔵版書目を欠く。

二 「太平楽府」の板木

さて、この一群の板木の中でとりわけ注目すべきは、「太平楽府」の板木が二組残っているということである。筆者はここ十年ほどの間に、竹苞楼旧蔵分も含めて、近世京都で商業出版に使用された板木を七千枚ほど見て来たのであるが、他にこのような例は見当たらない。そもそも近世の本屋が同一書の板木を二組作るとは、基本的に有り得ない。また、佛光寺蔵「撰集抄」（慶安三年版）「因果物語」（平仮名十二行本、天和く元禄頃刊）の板木が初刻時から明治期まで、二

百年以上に亘って使用され続けて来たという顕著な事例からも明らか
なように、火災などによって元の板木が失われるという事態でも生じ
ない限り、板木を彫り直すこともしない。では、『太平楽府』の板木は
何故竹苞樓に二組残っていたのか。これについては所謂「重版」、つ
まり海賊版の問題を想定すべきであろう。水田紀久氏によって昭和五
十年に『若竹集』と題し翻刻された『竹苞樓大秘録』を紐解いてみる
と、『太平楽府』重版の一件が記録されている。詳細については後述す
るが、いまその要点のみを記すところのようになる。

明和六年六月 『太平楽府』を丸屋善六との相合で趣向・出版。

同 八年四月 『太平楽府』を再刻。

同 八年冬 『太平楽府』海賊版を田中屋半兵衛が出版。

同 九年十月 竹苞樓と田中屋半兵衛が、正版・海賊版の板木を

それぞれ一部預かりとして和談。

安永四年三月 預かりの板木、一枚を残し、それぞれへ戻す。

同 六年十月 田中屋半兵衛死去に伴い、預かり板木一枚と海賊

版の板木を竹苞樓が全て引き取り。

かように、『竹苞樓大秘録』に拠れば、安永六年十月の段階で竹苞樓
は『太平楽府』の板木二組を所持していたことになる。ごく単順に考
えれば、残存の板木二組はその時のそれ、ということになるろう。

では、どちらが正版でどちらが海賊版なのか。結論から言えば、A
が明和八年四月に再刻された正版の板木、Bが海賊版のそれと判断し
て間違いないかと思う。その根拠の一つは、後述するように、板木A

で摺った本の幾つかに図Ⅲの板木右側で印刷した竹苞樓蔵版目録、ま
たそれとは別の竹苞樓の広告が添えられていることが上げられる。板
木Bによる印刷本には、管見の範囲ではその事実はない。板木Bが竹
苞樓の工房で作られたとは考えにくい根拠は他にもある。前掲一覽表
からも分かるように、板木Bは、序・本文・跋ときれいに丁の順番に
仕立てられている。が、竹苞書樓の狂詩集・狂文集の板木には、わざ
と丁の順番をずらしたり飛ばしたりして作る傾向が認められる。例え
ば『前戯録』の場合は1078に跋1・序2・序3・跋3を、106
5に序乙(1)・跋2・本文17・18を、という具合に、である。『勢多
唐巴詩』1097・1059、『吹寄蒙求』1843・1848、『銅
脈先生太平遺響』1119、『銅脈先生狂詩画譜』1073・107
6、『太平遺響二編』1121も同様。かように、板木を仕立てる際に
わざと丁をずらしたり飛ばしたりするやりかたが寛文以来あること、
かつて拙稿(前引『おくのほそ道』蛤本の謎)・日本古書通信895号「佛
光寺の板木」に触れたところ。何故そのようなやり方をするのかは
良く判らないが、一連の板木のなかに『太平楽府』Bを置いてみる
時、竹苞樓彫製の板木としては違和感がある。『太平楽府』Aの112
3も、丁を飛ばして仕立てられていることなども考え併せると、板木
Aが正版の、Bが海賊版のそれと判断して間違いない。なお、竹苞書
樓には、現在もAの板木で印刷された明治摺りと思しき版本が、表紙
を掛けていない状態のものも含めて、20部ほど残っている。これもま
た板木Aが正版のそれであることを傍証する事実ではあろう。海賊版

の板木を没取した場合、正規版元はそれを割る・削るなどして使用出来ないようにするのが通例。が、この場合、田中屋半兵衛死去後板木Bを引き取つた竹苞楼は、初刻本出版後二年も経たぬうちに再刻しなければならなかつた経緯も踏まえ、再刻正版Aの板木が万一失われた時の予備として板木Bを保存しておくことを考えたのではないか。そのように考えると、板木Bが板木Aと共に残つてきた訳が分かるような気がする。なお、冒頭に挙げた残存板木一覽表からも分かるように、Bの板木はAよりも丈が七糎ほど短い。その一例を圖Ⅷに上下対照して示す。御覧いただければ一目瞭然であるが、板木Bの方は板木の両端を刻面ぎりぎりに裁断してあるためである。同様な例が「続太平楽府」の板木にも見られ、『毛護夢先生紀行』『調題三昧』の板木はそれをさらに二丁張りに裁断した形で残る。何時かの時点で、板木の再利用を考えた処置と思われる。

三 「太平楽府」重版の一件

では二組の「太平楽府」の板木を手掛かりとして、重版の問題にもう少し立ち入つて見てみることにしよう。先にも触れたように、これについては「竹苞楼大秘録」に詳細な記録がある。以下、関係箇所を次に抄出する。

【記録①】

一、明和六年丑六月廿一日二趣向、作島中政五郎

太平楽府 丸屋善六殿相合

一、三拾式匁 右写本料金一両 二ツ割

一、六部五厘 小本形紙并卦引代 二ツ割

一、老分 板下紙并卦引代 二ツ割

一、四分三厘 島中政五郎へ 代二ツ割

一、九匁式分 古梅園真書一对

一、四拾壹匁六分 袋 六如殿序四丁 二ツ割

一、四拾壹匁六分 本文十八丁板下代

一、四拾壹匁六分 袋彫次壹匁五分 板木ヤ源兵衛殿

一、四拾壹匁六分 序六丁跋二丁次卅三匁 代二ツ割

一、四拾壹匁六分 本文四丁二付次十四匁

一、老匁式厘 文成星画并彫代 二ツ割

一、五分 長才房石印刻料 二ツ割

一、八匁式分五厘 五分九厘ツ、晋上本拾四部 二ツ割

但、七部 島中政五郎殿へ 二ツ割也

一、壹部 近藤齋宮殿へ

一、壹部 安田理右衛門殿へ

一、壹部 松岡定庵殿へ

一、壹部 戒做殿へ

一、壹部 仲間行事へ

一、壹部 法光寺へ

壹部 藤叔藏殿へ

ノ 十四部

惣合 正ミ九拾三匁七部五厘

【記録②】

明和八年卯四月八日趣向

太平楽府 再刻

一、壹匁式分八厘 板下本 壹部

一、八拾式匁八分七厘 惣彫賃

ノ 正ミ八拾四匁五分五厘

右元銀辰七月摺前途ニ入

【記録③】(ゴチックの行は、後の書入れか)

太平楽府 和談濟方之事

一、明和八年卯冬、田中ヤ半兵衛殿方ニ板行出来ニ付、甚困入対談之折無之処、明和九年辰十月廿三日ニ半兵衛殿見へ、勢州山形屋伝右衛門殿ト相合ニ論娯交と申者板行出来ニ付、則山形屋之留板預呉候段頼頼ニ見へ、無別意承知預り申候、此折右楽府之義、此方より改而參、始終之様子直対談之上、御互ニ無別意和談濟申候、則

此方板木 自一四至 自九十六至

ノ十式丁 板木三枚 田半江渡ス
内九より十六丁迄ノ八丁

板木安永四未三月十三日ニ受取

田半板木明朝序四丁自五八至 十七八跋二丁

ノ十式丁 板木三枚 此方ニ預

内五より八迄十七八跋式丁ノ八丁

板木安永四未三月十三日戻ス

右之通ニ、板木三枚宛相互ニ取渡シ致、已来摺候節者、銘々持板ニ而摺り可申事、勿論已来ハ、板賃壹部ニ付丸ニ而式分五厘ヲ相互ニ定候事、預り板木摺手間共売直壹匁替より、急度無相違売申間舖事、右之趣直ニ対談之上、治定如此候、已上、

明和九年壬辰十月廿三日

【記録④】

田中屋半兵衛殿方

太平楽府 一件之事

一、太平楽府義、明和九年辰十月廿三日ニ相對之通ニ、是迄相互ニ致来候処、半兵衛殿死去被致、跡目無相統ニ付、半兵衛殿持板木此方より申遣候留板共、引取呉候様ニ秋田ヤ伊兵衛殿見へ御願、勿論料物ニも不及、唯一通ニ而引受呉と之義承知仕、則右之板木不残留板共十月ニ受取申候、右ニ候へ共、為挨拶金壹匁板木代旁々ニ秋田ヤ伊兵衛殿へ持參仕、田半殿へ相渡シ被呉候段頼置候、依之何之出入も無之相濟申候事、

安永六年酉ノ十月十七日

右の【記録①】から【記録④】までを要約してみると、次のようになる。

・明和六年六月、丸屋善六との相合で「太平楽府」趣向。序・跋が八月であることから考えると、同年八月ごろ刊行か。

・明和八年四月、再刻を趣向。再刻の理由は不明。ただし、板木があれば再刻はしないはずで、何らかの理由で初刻の板木が失われたと考えられる。丸屋善六との相合かどうかもはっきりしないが、【記録②】には①に類出する費用を折半した意味の「二ツ割」という文言がなく、また③④に丸屋の名が出ないところから考えて、再刻は単独版であったか。

・明和八年冬、田中屋半兵衛方から「太平楽府」が出て、対談の折がなく困っていたが、九年十月に半兵衛がやって来て、勢州の山形屋伝右衛門との相合で「論娯交」を出したので、山形屋の留板を預かって欲しいと頼んだので預かった。この折に、「太平楽府」の件でこちらから改めて出向き、対談の上、和談した。因みに、田中屋半兵衛は「近世書林版元総覧」によれば、「文行堂」と名乗り、「京寺町三条下ル」に店を構え、「伊勢物語」(二元禄14)「世間侍婢氣質」(明和8)「和莊兵衛」(安永8)などを出し、大坂大乘坊藏板本の発兌元。竹苞楼と目と鼻の先にある店が海賊版を出したのである。

和談の内容は、それぞれが所持する「太平楽府」の板木各七枚のうち三枚ずつを相手方預けとするというもの。残存板木と【記録③】をつき合わせてみると、この段階での両店所時の板木は次のようになる。なお、ゴチックで示したものが竹苞楼正版の板木である。

《竹苞楼所持》

欠 袋・題簽、序1・2

1 8 9 8 序1・4、2・3

1 0 4 6 序1・2、3・4

1 1 0 1 卷一5・卷二8、卷二6・7

1 0 5 7 卷一5・卷二6、卷二7・8

1 0 6 3 卷三17・18、跋1・2 (刊記)

1 0 5 6 卷三17・18、跋1・2 (刊記)

《田中屋半兵衛所持》

1 0 5 8 袋・題簽(2枚)、序1・2

1 0 5 5 卷一1・2、3・4

1 8 4 6 卷一1・4、2・3

1 0 5 0 卷二9・卷三10、卷三11・12

1 1 2 3 卷二9・卷三16、卷三10・15

1 9 1 6 卷三13・14、15・16

1 1 5 6 卷三11・14、12・13

この取替えにより、どちらの店も手持ちの板木だけでは完本をこしらえることが出来なくなった。

・それに伴い、次の約定が交わされる。

- 1 以後、摺るときは「銘々持板にて」摺ること。
- 2 そのためには相手方に自店の「持板」を使わせてもらわねばならないので、板質(板の使用料)を壹部に付き「丸にて式分五厘」とすること。

3 「預り板木摺手間共、売直壹匁替」以上で売らないこと。なお

この売値については、竹苞樓「蔵板記」に「太平楽府」「九分」とあるのが参考となる。

その後、安永四未三月十三日に（因みに、【記録③】にゴチックで示した二行は、内容からみて後の書き入れであろう）板木二枚八丁分を、それぞれの手許へ戻すことになった。理由は不明であるが、煩瑣な手間を省こうとしたか。結果、両店の所持板木は次のようになった。

《竹苞樓所持》

欠 袋・題簽、序1・2

1898 序1・4、2・3

1046 序1・2、3・4

1101 卷一5・卷二8、卷二6・7

1123 卷二9・卷三16、卷三10・15

1156 卷三11・14、12・13

1063 卷三17・18、跋1・2（刊記）

《田中屋半兵衛所持》

1058 袋・題簽（2枚）、序1・2

1055 卷一1・2、3・4

1846 卷一1・4、2・3

1057 卷一5・卷二6、卷二7・8

1050 卷二9・卷三10、卷三11・12

1916 卷三13・14、15・16

1056 卷三17・18、跋1・2（刊記）

この処置により、囲みに入れた二枚がそれぞれにとって「留板」の扱いとなる。

その後、半兵衛死去（年月日不明）。「跡目相続無きに付き」、秋田屋伊兵衛の取り持ちで、半兵衛所持分の「太平楽府」海賊版の板木一切と竹苞樓方から預けておいた留板一枚を、「料物」なしで安永六年十月に受け取り、「挨拶のため金壹匁」を田半方へ渡してくれるよう秋田屋に預ける。全て片がついたのが、安永六年十月十七日のことであった。この時点で、竹苞樓は「太平楽府」正版と海賊版の二組の板木を所持することになったのである。

四 「太平楽府」の版本

以上、残存板木と「竹苞樓大秘録」をつき合わせることににより、竹苞樓に「太平楽府」の板木が二組伝わって来た経緯は大略明らかにしたと思う。ところで、浅川氏は『狂詩書目』の「太平楽府」解説で、「大別して①初刻本、②再刻本、③三刻本の三種がある。②③は①を元に全冊を彫り直したもので、相互に小異があるので注意を要する。」としておられる。「竹苞樓大秘録」の記録に照らして、初刻本・再刻本の存在については疑う余地は無く、従来の書誌学的立場に立てば、それ以外の異板を三刻本と考えることは極めて自然であった。

が、再刻本のそれと思われる板木が竹苞楼に保存されて来たという事実を踏まえる時、「三刻本」という考え方は成り立ち得ないのではない。再刻本の板木があるのに、わざわざ三刻の板木を彫製する必要は全く無いからである。そこには『竹苞楼大秘録』にも記録されている海賊版の問題を想定しなければならぬ。明和四年の「寢惚先生文集」と共に狂詩集・狂文集大流行の火付け役となった『太平楽府』の後世への影響については、岩波『日本古典文学大辞典』の該書解説で、浅川氏が「版元の竹苞楼は永くこの版木を蔵して刷り出し大いに流布、その後世への影響は、本書の翌年に出た忠実な模倣『茄子腐壘』から、後統狂詩家の銅脈によせる作や敬意、詩題の類似、果ては愚仏の『統太平楽府』（文政三年）や『明治太平楽府』と題する明治十三年の狂詩書まで、深く長いと言わねばならない。」と述べておられるが、小本『俳諧七部集』にその一典型が見られるように（奈良大権（一）・（二）参照）、人気商品に海賊版はつきもので、近世の出版物で版種が多いものについては、先ずそのことを疑ってかかる必要がある。

管見によれば、『太平楽府』には板木の異なる版本が四種ある。いま仮にこれをD・A・B・C本として、そのあたりの区別をしてみることにしよう。なお参考のため、四種の版本の明朝体の序文（業寂僧都序）一丁と本文一丁を図X・図Yとして掲載しておく。図版の典拠は、D本が近世文学未刊本叢書『狂詩狂文篇』の影印、A本が奈良大

蔵本④、B本が奈良大蔵本②、C本が奈良大蔵本①である。

D 初刻本 丸屋善六・竹苞楼相版の初刻本と考えられるもの。

近世文学未刊本叢書『狂詩狂文篇』影印収録本・岐阜市立図書館本・『狂詩書目』口絵紹介本（底本は浅川氏蔵本①）がこれにあたる。『狂詩狂文篇』の影印・解題に拠り、『狂詩書目』の解題を参考にして、初刻本の書誌を記す。中本一冊。表紙の色は不明。（浅川氏蔵本①は、淡青色）。双辺題簽「太平楽府」。見返し、単梓有野三行に「銅脈先生／太平楽府／書肆 長才房蔵印（陽刻朱印「長才／房記」）。狐の嫁入り図の朱の魁星印あり。内容は、応昭子序二丁・業寂僧都序（明和己丑八月）四丁・本文十八丁・跋文二丁（明和己丑八月、桑津貧楽）からなり、跋二丁裏に刊記「多和井茂内著／書林 只見屋調助／大井屋佐平次」を入れる。丁付はそれぞれ版芯に「序一、序二、序一、四、卷一 一、五、卷二 六、九、卷三 十、十八、一、二」とある。このD本、以下に触れるA・B・C本に比べ、刻線に「太い細い」のめりはりがあつて、字体がもつともしつかりしていること、加えてA・B本の祖本と考えられること、魁星印があることなどから、初刻本と判断して良い。この本の板木は、明和八年四月八日に再刻本が趣向された時点で失われていたはず。出版期間は一年半余で、残存版本が少ないのも頷ける。

A 再刻本 板木Aによる印刷本。

明和八年の再刻時より、竹苞楼先代の在世中まで二百年余に亘り出

版が重ねられたと考えられ、したがって伝本も多い。管見に入ったものに次の諸本がある。奈良大蔵本③・奈良大蔵本④・宮田本②・大喜多勤学本・蓬左文庫本①（分類番号、尾23-3）・抱谷文庫本・李花亭本・浅川氏藏本②・③。

奈良大蔵本④によって、書誌を記す。薄藍色表紙、中本一冊。双辺白地元題箋、「太平楽府」。袋・見返し無し。内容は、丁付・序・本文・跋・刊記とも、前述初刻本に同じ。巻末に、「太平楽府」以下、「当世心筋立」までの十四点の竹苞樓蔵版目録一丁を添える。この十四点のうち、最も後に出したのは文政三年の『統太平楽府』であるから、奈良大蔵本④はそれ以降の出版。なお、この目録は、もともと『銅脈先生狂詩画譜』の巻末に添えるべく仕立てられたもので、その後板木を裁断して一部に入木をして修正、『太平楽府』その他の後印本にも転用されたものである（図Ⅲ参照）。大喜多勤学本・蓬左文庫本①は、表紙の色は不明乍ら、目録を含め奈良大蔵本④に同じ体裁。ただし、蓬左文庫本①は後補書題箋。浅川本②は、枯葉色表紙に白地双辺題箋。表紙見返しに「文久三癸亥載孟夏／張陽現散人」の書き入れが、後表紙見返しに竹苞樓錢屋惣四郎の『唐宋三十六家史論奇鈔』（嘉永二年刊『唐宋名家歴史論奇鈔』か）の広告がある。奈良大蔵本③は、筆者が竹苞樓から直接購入した明治摺と思われる本。藍色表紙で、双辺黄色地元題箋、「太平楽府」。初刻本の見返しと同体裁（ただし、枠が双辺）の袋を添える。袋には、初刻本見返しと同一印文異類の陽刻朱印「長才／房記」がある。この本には、目録の一丁は無い。

宮田本②・浅川本③は、奈良大蔵本③と同体裁で、やはり袋がある。抱谷文庫本・李花亭本、表紙・題箋の地色は不明乍ら、奈良大蔵本③と同体裁で、袋は無い。なお、題箋は後補の蓬左文庫本①を除き、全て一種同板と見受けられる。

ところでこのA本、再刻の折に元になったのはDの初刻本だったはずである。いま両書を対校してみると、A本に再刻の際の誤脱が目立つ。図Ⅳ・図Ⅴの範囲で指摘してみると、明朝序一オ3「瀟」瀟・オ4「知」音・ウ6「快」楽、本文一オ7「御」札・ウ1「筋」違・ウ1「線」香・ウ2「氣」蹙・ウ7「借」錢・ウ7「道」案の音訓読符号が落ちていた。同様の音訓読符号の誤脱が、右を含め全部で22箇所、その他ルビの誤り2箇所・本文の誤字1箇所、合計25箇所誤りがある。なお、この25箇所のうち、音訓読符号の誤脱20箇所とルビの誤り1箇所が巻一の一〇四丁、つまり板木1846に集中していることに取り敢えず注意しておきたい。その一方で、D本の誤りを修正した箇所も少なくはない。明朝序一ウ6「空」の〇を補う（ただし、浅川氏藏本①には〇あり）、本文一ウ2「棒」の左下に返り点「一」を補うなどがそれで、音訓読符号・返り点の補訂、送り仮名・ルビの補訂、本文誤字の訂正が、右を含め、合計18箇所認められる。数としては誤りの方が多く、一見杜撰な印象を受けるが、これについては次のような事実にも注目する必要がある。A本の板木を仔細に見てみると、実に微細な入木が施してあることに気が付く。図版の範囲で言えば、明朝序一オ5「知」「雨」の送り仮名、ウ4

「在」の「ザ」の濁点部分、ウ5「杓」のルビ「ク」・送り仮名の「ノ」、本文一オ6「雷」のルビ「ナ」、オ7「無」の送り仮名「シ」、
「通」の訓読符号、本文一ウ1「様」のルビ「サ」、「手」^ヤ「按」^アの送り仮名、ウ2「申」左下の返り点「二」、「念」佛の音読符号、ウ3「汗」のルビ「ア」、ウ5「遥」の送り仮名「二」、ウ6「随」^ズ「求」の音読符号、以上全て入木である。これらを含め、D本で見落とされていたものも含めて、音訓読符号・返り点・送り仮名・ルビ・ルビの濁点を65箇所にあつて入木で補訂してある。それはA本が校正段階でかなり綿密にチェックされたことを意味しており、この一組の板木が正規版元竹苞楼の工房で彫製された何よりの証拠となろう。次に取り上げるB本の板木にはかような入木は一切認められない。なお、これらの入木のうち28箇所が、やはり巻一の「四丁、つまり板木1846に集中している。先の誤脱箇所も同じ板木に集中していたが、それは1846の板木を扱った職人の技量の問題であつたのかもしれない。もしこの板が大過なく仕上げられていれば、全体としては修正箇所の方が多くなり、再刻本は初刻本より善本となつたはずである。

B 海賊版I 板木Bによる印刷本。

明和八年頃から安永六年十月冬頃までの六年程の間、田中屋半兵衛の店で摺られた本。奈良大蔵本②・奈良大蔵本⑤・宮田本①・東京芸術大学附属図書館蔵本文庫本・浅川本④がこれに該当する。宮田本①は、薄縹色表紙。双辺黄土色地元題簽、「太平楽府」。板木Bの105

8番には題簽が二枚並べて彫つてあるが、うち一枚と一致する。初刻本と同形式の単枠有野三行に「銅脈先生／太平楽府／書肆 長才房蔵」とする見返しがあるが、再刻本の袋にも見られた「長才／房記」の朱印は無い。なお、この見返し、Bの1058番に彫りさしのもので、再刻本Aの多くに見られる竹苞楼の蔵板目録・広告はもとより添えていない。奈良大蔵本②も薄縹色表紙。題簽、欠。見返しなし。目録・広告も無し。奈良大蔵本⑤は、再刻本奈良大蔵本④と同様の薄藍色表紙。双辺白地元題簽、「□□（剥落）楽府」。こちらの題簽は、二枚並びのもう一枚と対応するように思われる。見返し・目録・広告無し。芸大蔵本は表紙の色不明。無辺書題簽で「太平楽府」。見返し・目録・広告無し。

さて、このB本、基本的にはD本に拠っているが、A本をも参照している節がある。それは、A本がD本を元に再刻をした折の誤脱箇所がB本には認められず、またA本で修正した箇所13のうちB本は11箇所を踏襲しているからである。またB本独自の修正も2箇所ある。うち1箇所は、明朝序三ウ1「膚」の送り仮名で、D本・A本・C本いずれも「膚」と誤るが、B本では「膚」と改める。もう1箇所は本文十三ウ7「叩」のルビ・送り仮名で、D本「タッテ」と誤り、A本は「タ、ヒテ」と修正意識を見せるが、B本はこれを「タ、ケトモ」とする。文意からすると、これはB本が正しい。かようにB本は一見校訂本文を作っているようにも見えるのだが、一方では誤りも大変多

い。本文一オ6「轆」のルビ「シ」、オ7「冷」のルビ「キ」を落としているのを始めとして、ルビの誤り・送り仮名の誤り・音訓読符号の脱落・本文の誤字などが合計42箇所ある。その誤りの多さは、B本が基本的には海賊版であったことと無関係ではなからう。

なお、このB本については一つの不審がある。それは、奈良大蔵本②と同体裁で元題簽を欠く浅川本④で、この本には、D初刻本と同板の見返しがある。魁星印・「長才／房記」印も同類。これをどのよう
に考えたら良いかということが疑問として残るが、田中屋半兵衛が竹苞樓に摺り置きの見返しを譲り受けて転用したのではないかと、今のところ推測しておきたい。

C 海賊版Ⅱ 再刻本Aを元にした海賊版。

D・A・B本に比べ、刻線が極端に細い。太い細いのめりはりをつけて彫る、その手間を省いた形跡が歴然としている。版元・出版時期・出版地、不明。管見に入ったものに奈良大蔵本①・蓬左文庫本②（分類番号、尾23-2）がある。奈良大蔵本①は薄茶色表紙。双辺白地元題簽、「太平楽府」。内容は再刻本と同じ。見返し・広告なし。蓬左文庫本②は表紙の色・題簽の地色、不明。双辺元題簽、「太平楽府」。

題簽・本文とも奈良大蔵本①と同板。
C本がA本を元に作られている根拠としては、明朝序一丁・本文一丁を始め、A本の誤脱・修正箇所をそのまま踏襲していることを上げるだけで十分であろう。B本に較べても、杜撰箇所が極めて多い。図版の範囲で言えば、明朝序一オ2「喟」然の音読符号脱。オ4

「荒」の送り仮名「レ」脱。オ5「覚」左下の返り点「三」を「二」と誤る。ウ1「妖」物、本文一オ7「通」込、一ウ4「悠」然、ウ6「随」求の音訓読符号、ウ6「莫」のレ点、脱。以上のような音訓読符号・返り点の脱落が、全体で72箇所に及ぶ。その数は、うっかり落としたというよりも、邪魔くさがって省いたという印象を与える。さらに、明朝序一オ2「鳴」のルビを「鳴」と誤り、オ6「過」の送り仮名を不自然に誤刻し、ウ4「郷」のルビ「ゴ」を落とすなど、ルビ・送り仮名の誤脱が全体で48箇所ある。加えて、ウ4「在」「者」「勝」「這」ウ5「主」、いずれも字体が不自然。これが全体で6箇所ある。いずれも仕事の杜撰さを示す事柄で、典型的な海賊版といえる。

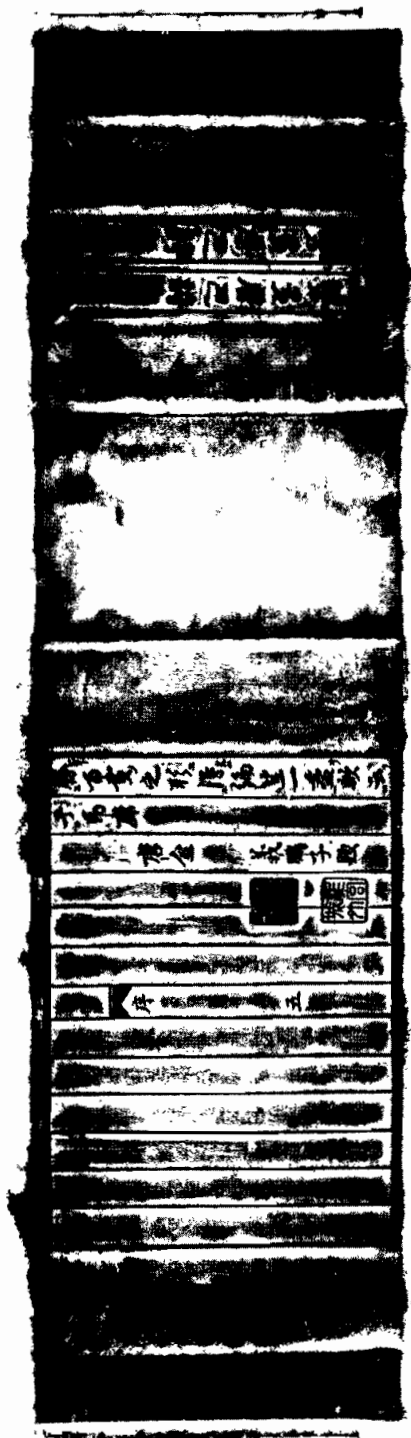
なお、前引「狂詩書目」の『太平楽府』解題と浅川氏から借覧した該書版本を照合させていたと、氏はB本を再刻本と、A本を三刻本と判定しておられるように見受けられるのだが、残存板木をもとに考えると実際はその逆であることを、今後誤解を残さぬため、指摘しておきたい。

以上、竹苞樓に伝わってきた狂詩集・狂文集の板木をベースに、その出版に関する幾つかの問題を見て来た。従来の研究に少しでも新しい事実を付け加えることが出来たとすれば、それは全て浅川氏のおかげである。氏の『狂詩書目』が無ければ、私は板木を引きずって右往左往し、空しく消日していたに違いない。氏の学恩に甚深の謝意を表

する次第である。

(平成十八年八月三十一日稿)

*この稿は、平成十七年度奈良大学研究助成に拠るものである。

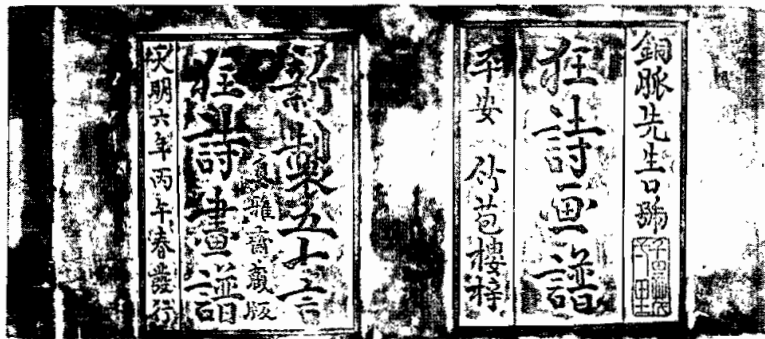


同上裏拓本

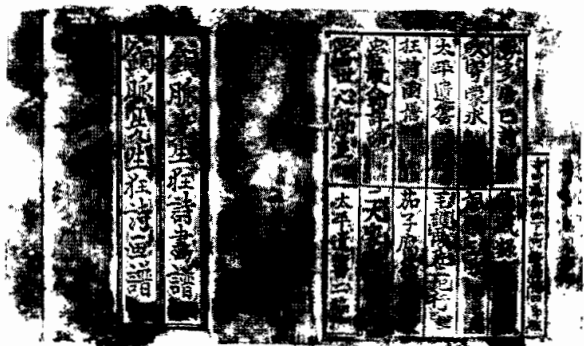


図1 「勢多唐巴詩」板木(1500番)表拓本

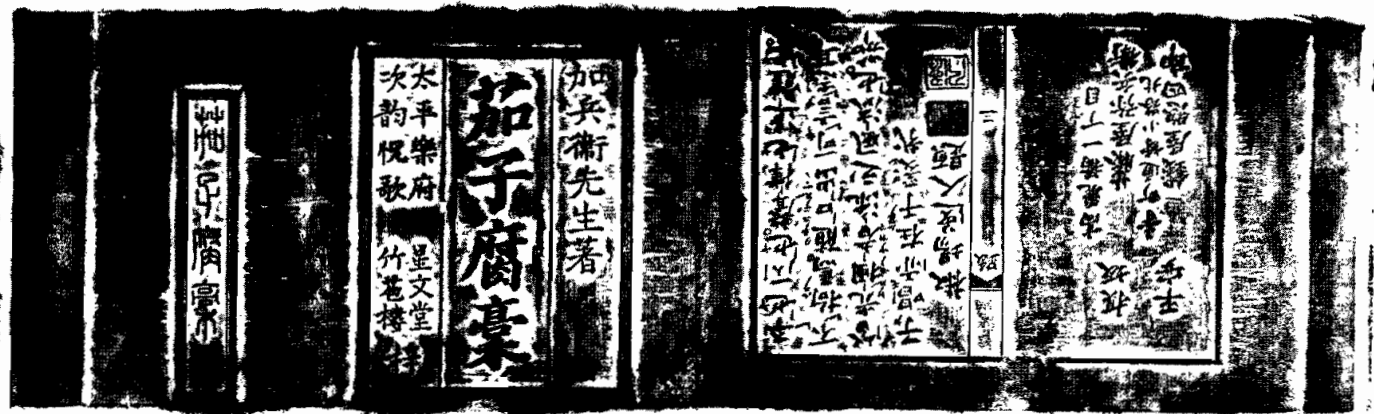
圖Ⅱ 「銅脈先生狂詩圖譜」板木 (1141番) 表 拓本



圖Ⅲ 同左 板木 (2318番) 表 拓本



圖Ⅳ 「茄子府羹」板木 (1083番) 表 拓本



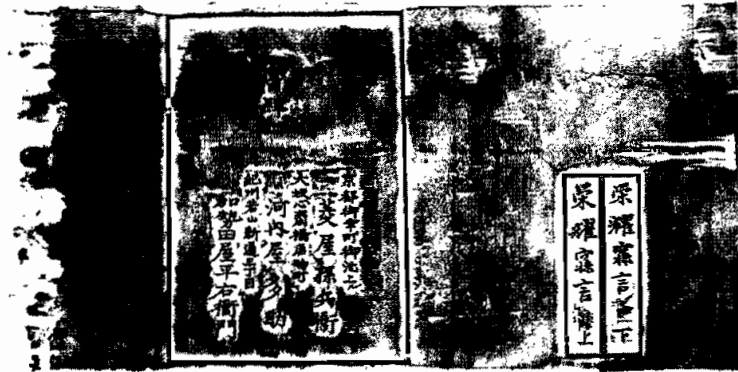
図V 「狂詩馬鹿集」板木(1163番)裏 拓本



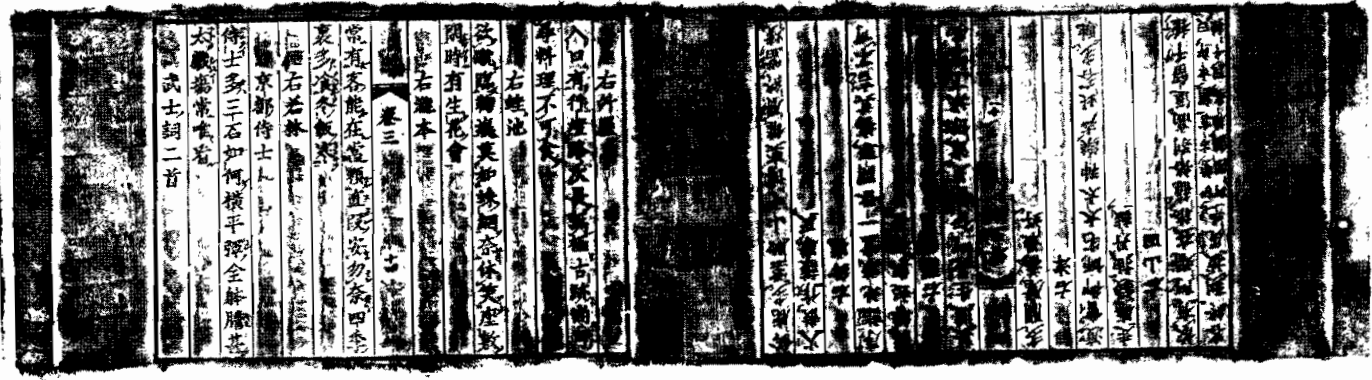
図VI 「精物楽府」板木(1855番)表 拓本<部分>



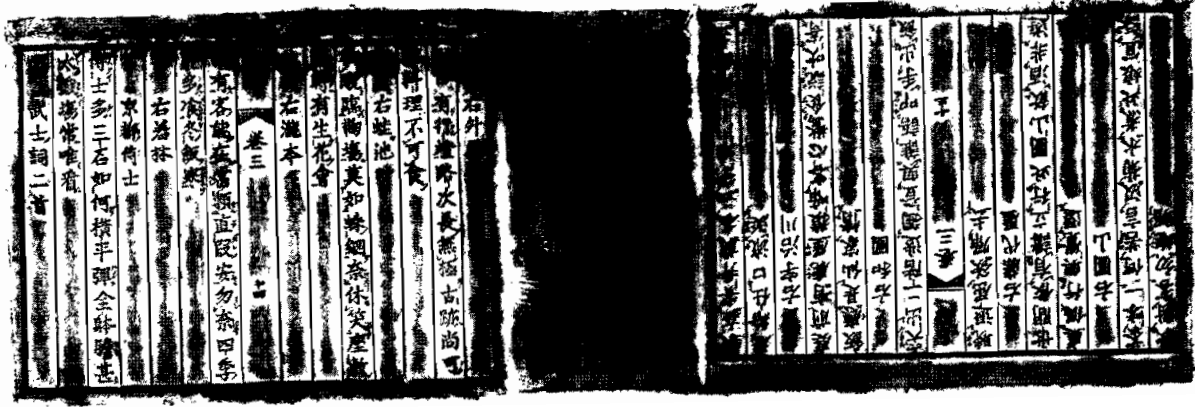
図VII 同左裏 拓本<部分>



圖Ⅷ 『太平樂府』A板木(1156番)表 拓本



『太平樂府』B板木(1916番)表 拓本



圖X 太平樂府二本文

太平樂府卷之一
胡逸 滅方海 著
惠萊 安陸羅 按
五言古詩
呈景蕃上人
降雹澍大雨輒出雷聲音更視氣色
冷忽無生居心適之二階下唯類御
卷一
孔張筋違釣蚊帳攪立線香手按
終木樁終無由念佛此時心正直氣
變汗如淋初美金聾耳又懷盲目人
不知嗚與電悠然安其身
遙寄霖愍先生
客莫如坊王佛無貴庸茅茶屋恣受
惡借錢積如丘道樂異見重親類相

日本

太平樂府卷之一
胡逸 滅方海 著
惠萊 安陸羅 按
五言古詩
呈景蕃上人
降雹澍大雨輒出雷聲音更視氣色
冷忽無生居心適之二階下唯類御
卷一
孔張筋違釣蚊帳攪立線香手按
終木樁終無由念佛此時心正直氣
變汗如淋初美金聾耳又懷盲目人
不知嗚與電悠然安其身
遙寄霖愍先生
客莫如坊王佛無貴庸茅茶屋恣受
惡借錢積如丘道樂異見重親類相

日本

太平樂府卷之一
胡逸 滅方海 著
惠萊 安陸羅 按
五言古詩
呈景蕃上人
降雹澍大雨輒出雷聲音更視氣色
冷忽無生居心適之二階下唯類御
卷一
孔張筋違釣蚊帳攪立線香手按
終木樁終無由念佛此時心正直氣
變汗如淋初美金聾耳又懷盲目人
不知嗚與電悠然安其身
遙寄霖愍先生
客莫如坊王佛無貴庸茅茶屋恣受
惡借錢積如丘道樂異見重親類相

日本

太平樂府卷之一
胡逸 滅方海 著
惠萊 安陸羅 按
五言古詩
呈景蕃上人
降雹澍大雨輒出雷聲音更視氣色
冷忽無生居心適之二階下唯類御
卷一
孔張筋違釣蚊帳攪立線香手按
終木樁終無由念佛此時心正直氣
變汗如淋初美金聾耳又懷盲目人
不知嗚與電悠然安其身
遙寄霖愍先生
客莫如坊王佛無貴庸茅茶屋恣受
惡借錢積如丘道樂異見重親類相

日本

**Printing Blocks of the Secondhand Bookstore *Chikuhōrō* :
centering on comic poetry and literature**

Kazuaki Nagai